

道路の環境保全を通して 地域活動の再生を

「北のみち普請ワークショップin富良野」

主要道路の環境保全だけでなく小さな道にも目を向けて



小林会長



高田富良野市長



栗山会長



らの手で行うことが地域の力になり、花人街道の景観形成も進んでいくのでは、と意見が出ました。今後の課題としては、花人街道の活動に対する一般市民の認知度の低さが挙げられました。地域の各場所で様々な活動が行われているので、それをどのように合意形成していくか、30年位の長いスパンで考えていくと、その息の長い取り組みが次世代への橋渡しになると提言いただきました。

さらに、今後の活動を発展させるキーワードをワークショップのメンバーに挙

「この会が、失われつつある地域社会を再生していくきっかけになれば」と、「北のみち普請を育てる会」の小林会長のあいさつの後、高田富良野市長から「道を通しての事業展開の示唆をいただけるよい機会」とあいさつをいただき、本題に入りました。富良野市では住民のボランティア活動等で花人街道と呼ばれる国道237号沿いに花や木を植えて絵になるまちづくりを進めています。花人街道とは、国道237号に連なる2市5町1村と関係機関が、一緒に美しい景観づくりを進める中で生まれた地域の愛称です。その「花人街道237号」からみた富良野市の可能性を探るのが今回のテーマです。

話し合いは、地域住民が主体的に活動するための具体的な意見を紙に記述していただき、提出された50近い意見をジャンル分けして議論を進めました。その中の一つ「道路関係」では、主要道路だけでなく、小さい道の魅力を発見する「潜在力の発掘」が重要という意見が出されました。また、問題提起として地域住民同士の合意形成、つまり民民合意をどう形成するのかということについて、この場合、合意達成まで住民自



多くの意見が貼られたパネル

げていただきました。「民の合意形成」や「官の合意形成」、「潜在力の発掘」などが挙げられ、事務局からは「237号は住民参加からスタートして、できることから取り組み、地域コミュニティを形成することも大事」との意見が出ました。

最後に小林会長から「官と民が協同で事業を行う場合は、信頼関係が必要。そのためには、自分の責任をとるという約束が必要。官も地域に対しての責任を明確にすることが次の段階なのではないか。また、237号の表街道も大事ですが、小さな道の多彩な可能性も育ててほしい」と、総括をいただき、終了。

自分たちの街は自分たちでつくっていくという積極的な姿勢が大切、との共通認識を得られたみち普請ワークショップでした。



活発に意見を発表する参加者のみなさん

- コーディネーター
NPO法人「水環境北海道」専務理事 荒関 岩雄
- アドバイザー
北海道大学大学院工学研究科 教授 小林 英嗣
- 富良野花人街道237・景観形成推進協議会 会長 栗山 則政
- 北のみちづくり協会 専務理事 太田 清澄
- R333号丸瀬布市街ボランティアサポート 代表 田村 好彰
- 富良野市長 高田 忠尚

平成14年11月5日(火)・6日(水)の両日、富良野市と赤平市において、「北のみち普請」ワークショップが行われました。「みち普請」とは、住民と行政のパートナーシップによる道路の環境保全(管理・運営・利用等)の先進的な活動として、平成13年から全国的に行われている取り組みです。今回、「北のみち普請を育てる会」会長である北海道大学大学院工学研究科の小林英嗣先生はじめ、アドバイザーの先生方と地元で活動する多くのまちづくりグループの人たちが積極的な意見交換を行い、今後の活動を発展させていくための方策を探っていただきました。



親松赤平市長



荒関氏と和田課長



北海道クラシックカーフェスティバルの発表



アイラブ・ロードあかびら推進協議会のみなさん

「北のみち普請ワークショップin赤平」 道路を舞台に世代を越えた「赤平型」のまちづくり



「北のみち普請を育てる会」の小林会長のあいさつの後、親松赤平市長から、滝川に高速道路が通りインターができたことによる地元への企業誘致を例にとり、「道路網の整備は、産業面、生活面共に大切なこと」とあいさつをいただき、ワークショップが開催されました。

まず、赤平市で行われている多彩なボランティア活動の紹介を各グループの方にいただきました。道路や川の美化清掃運動や昨年で15回目を迎えるまでに成長したクラシックカーのイベント等の取り組み、そして赤平では花や木に注目して、道路環境や景観を考えながら「花のまちづくり」を行っていることも報告されました。

アドバイザーの荒関氏からは、道づくりの活動に市民が参加する「みち普請」の活動は、お互いを知り合う機会にもなり、安心、安全な社会づくりの基盤になる、というようにも捉えられと意見がありました。さらに、各ボランティアが集まれる拠点(ハートフルセンター)を昨年夏に設置したことで、人や情報の交流が進み、まちの活性化に期待がかかるという話もありました。

会の終盤に、様々な参加者から出た意見を小



発表用に用意されたパネルの一部

林会長にまとめていただきました。赤平市で育っている複数の地域活動を盛んにするためには、それらをまとめてコーディネートできる人や組織、ツールが重要で、まちづくり、道づくりもネットワークが必要という話。活動を客観的に見て意見交換できる外部の人間の存在や、活動を世間に広く発信する広報活動も重要。こんな街にしたい、こんな団体になりたいと具体的な将来ビジョンを持って、子どもや家族と一緒に参加する世代を越えてのまち

づくりを。さらに、固有の文化や環境が地域の魅力になるという視点から、赤平の産業遺跡である炭坑を資源として見直して、鉱山体験ツアーなどの観光に利用する取り組みの紹介。そして小林会長は、「高齢者が多いことをマイナスイメージで捉えず、質の高い人がいる、という意味でプライドを持つことも非常に大事。日本中同じまちづくりをする必要はなく、大きな道路、小さな道路を舞台に「赤平型」のまちづくりを若い人も含めながら次のステップに踏み出していってほしい」と締めて会を終了しました。

固有の環境や文化をしっかりと守ってそれを磨き、発信、交流していくというキーワードは赤平に限らず地域再生の重要な鍵になりそうです。

コーディネーター	北海道開発局札幌開発建設部道路調査課長	和田 忠幸
アドバイザー	北海道大学大学院工学研究科 教授	小林 英嗣
	北海道大学大学院工学研究科 助教授	瀬戸口 剛
	北海道大学大学院工学研究科 助教授	高野 伸栄
	NPO法人「水環境北海道」専務理事	荒関 岩雄
	R333号 丸瀬布市街ボランティアサポート 代表	田村 好彰
	赤平市長	親松 貞義